

ピア・レビュー

本欄では各論文についてのピア・レビューを掲載した。各論文の趣旨および今後の展開可能性について論じられている。本文を読む際に参照されたい。

福岡良明『「社」と「骨」の闘争——靖国神社・千鳥ヶ淵戦没者墓苑と「戦没者のシンボル」の不成立』

戦後の日本では、広島の平和記念公園や沖縄のひめゆりの塔などの戦跡が創られてきたが、なぜか日本の戦没者全体を象徴するものは創られてこなかった。しいてあげるなら、明治以降の国事に殉じた戦没者を祀る靖国神社と、先の戦争における無名の遺骨を収めた千鳥ヶ淵戦没者墓苑がそれにあたるが、そのいずれもが全体的な象徴として社会に広く受け入れられているとは言い難い。なぜ、全体的なシンボルは「成立しなかった」のか。従来の研究には無かった、この「不成立」という視点から、靖国神社

と千鳥ヶ淵戦没者墓苑との関係を軸に国民的シンボルをめぐる葛藤の過程を検証した歴史社会学的研究が、福岡論文である。二〇〇五年に超党派議員による「国立追悼施設を考える会」が発足し、特定の宗教によらない「全国戦没者追悼施設」構想の中、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拡充案も検討された。そうした今世紀の動向をも射程にいれることで、さらに今日的議論展開も可能かもしれない。

(佐藤八寿子)

花田史彦『「民主主義」から「戦後主義」へ——映画『青い山脈』（一九四九年）をめぐる輿論と世論』

本稿は、戦後幾度も映画化された石坂洋次郎原作『青い山脈』の受容史を跡付けながら、「戦後民主主義」の社会的な意味変容を考察するものである。著者によれば、原作（一九四七年）や第一回映画化（一九四九年）をめぐるのは、後年のような「明るい戦後民主主義」のイメージはあまり読み込まれず、

むしろ民主主義の原理的なあり方を問う輿論 public opinion が少なからず見られた。だが、その後の映画化作品については、民主主義そのものではなく、漠然と「戦後」を語る議論が際立つようになった。語り口自体は、「戦後民主主義」への違和感から「明るい戦後」への懐古まで様々ではあったが、そこに通底するのは、漠然とした「戦後」をめぐる心性(世論 popular sentiments)である。戦後の初期にも、『青い山脈』をめぐる、男女交際の憧れのような叙情的な語りも見られたが、原理的な「民主主義」への問いが後景化するなかで、『青い山脈』をめぐる評価は、戦後初期にいくらか見られた世論が際立つようになり、輿論が退潮することとなった。大衆的なメディア文化のなかで、「民主主義」や「戦後」がどう位置付けられてきたのかを考察した興味深い論考である。言説変容の背後にある戦後社会の変化についても、著者の今後の分析が期待される。

(福間良明)

トパチョール・ハサン「京都における明治百年祭(一九六八)イベント——独立プロ映画『祇園祭』と『京都』イメージの形成」

東京オリピック(一九六四年)と大阪万国博覧会(一九七〇年)に挟まれた一九六八年、全国各地で近代化の歩みを回顧する明治百年祭イベントが展開された。そうした中、京都では「革新」知事が全面的にバックアップした百年記念事業の歴史大作、『祇園祭』(伊藤大輔監督、中村錦之助主演)が制作された。日本政府主催の明治百年記念式典が日本武道館で挙行された一〇月二三日のちようど一月後、一月二三日に『祇園祭』は全国公開されている。記憶の空間におけるナショナルとローカル、さらに記念事業における国家権力と市民自治という二重の対抗関係が、西口克己の原作小説、さらにその原案になった林屋辰三郎らの紙芝居にまでさかのぼって描き出されている。こうしたメディア・イベントにおける文化ヘゲモニーの析出は説得的である。一方、

『祇園祭』の大ヒットが京都への観光客増加、都市ブランド力の向上に与えた影響については必ずしも説得的とはいえない。大阪など他都市との比較をふくめ、別のアプローチが必要だろう。

(佐藤卓己)

赤上裕幸 「もうひとつの情報化社会——きたるべき『メディア史の終わり』に備えて」

一九六〇年代を中心に情報化社会論を整理した研究史である。ほかの時代への応用の可能性が高い優れた論考となっている。通説ではバラ色の未来が主流であったという情報化社会論を、一九六〇年代の梅棹忠夫、未来学研究会を手がかりに問い直す。たとえば、軍事用語であった情報という言葉に新たな解釈を与え、マスメディアを情報産業と位置づけ直すなど、当時の発想を振り返る。他方、情報化社会における新たな需要を捉えようと、未来学には企業から関心が集まっていた。「マルチメディア」「IT」

「Feb.2.0」など今日でも情報に関連する言説はおびただしく登場する。これらを分析するにあたり、かつての可能性を探ることは有益な試みとなるはずである。

(河崎吉紀)

河崎吉紀「ネットウヨとナチスの隔たり——掲示板『2ちゃんねる』の言説分析から」

河崎論文は、インターネット掲示板「2ちゃんねる」に頻出する「ネットウヨ」と「ナチス」という用語間の意味的な関係の希薄さについて明らかにしている。ナチズム以後ドイツで台頭した人種排斥運動は、総称してネオナチと呼ばれるが、こうした明らかに差別運動は長らく日本ではタブーであった。だが今日、日本でも在日特権を許さない市民の会(在特会)のヘイトスピーチが無視できない社会問題として浮上している。そうした現象を象徴するようにネット掲示板の世界では、「ネットウヨ」なる用語が

「ナチス」とともに使われるスレタイが現れた。しかし河崎論文は、各用語が他者を揶揄するネット用語以上には、それほど強い意味的なつながりが見出せないことを指摘する。つまり「日本のナチス」なるものは実態の親／反ナチを越えて用語が一人歩きしている状態なのである。

だがネット掲示板が建前を笑い、本音が露出するメディアであることは否めない。河崎論文によれば「ネトウヨ」と強い相関が見られたのは「ナチス」ではなく、「中国」「韓国」の語であった。現実社会とネトウヨ言説との関係については本論文では少し触れられているにすぎないが、その点についての今後の考察が待たれる。

(石田あゆう)

石田あゆう「『主婦之友』の新聞広告に見る石川武美の販売戦略」

大正六年に創刊され、家事労働を担う「主婦」た

ちの圧倒的支持を得た『主婦之友』。後発の婦人誌は、いかにして百万部を発行するマス・メディアになったのか。本稿は、主婦之友社の創業者であり、終戦時まで社長兼編集長を務めた石川武美の販売戦略に着目する。「読者のため」の雑誌作りをモットーとした石川は、自ら雑誌の宣伝までを担当する広告人でもあった。読者への懸賞サービスや文化事業の宣伝効果はこれまでの研究でも度々言及されてきたが、石川論文の画期性は、『主婦之友』の危機対応に着眼した点にある。同誌への世間の中傷、関東大震災、戦時の用紙制限や言論統制、敗戦後の戦争責任追及への対処によって、雑誌の危機は読者の「信頼」を得る好機となった。そこで石川が積極的に活用したのが新聞広告である。本稿で活写される雑誌と新聞の相互参照関係、「雑誌と読者の絆」の育成は、同時代のジャーナリズムを理解するだけでなく、現代の公共圏のあり方を検討する上でも示唆に富んでいる。

(松永智子)

佐藤八寿子「丘の上の赤い屋根——映画《小さいおうち》にみる山の手ディスタンクション」

元来「下町」ではなかった葛飾柴又が今や「下町」の代名詞となつていゝように、「山の手」も大正昭和期の都市圏拡大によつて変容してきた。かつて東京「郊外」であつた田園調布は、『暮らしの手帖』創刊者である花森安治らの文化人が居住した高級住宅地として、「山の手」文化にあふれた地域となつていゝ。本稿は山田洋次監督映画《小さいおうち》を手がかりとして、東急池上沿線を中心とした「新山の手」地域のフィールドワークを行い、「山の手」と「下町」との間の「国境」が変容するプロセスを考察したものである。住民の文化活動および相互交流の活発さ、公共財への関与の高さといった「新山の手」地域の特徴が描き出され、現代においても存続する階級差の実態がつぶさに観察されている。これまでの郊外論が対象としなかつた地域に「国境」といふ観点から迫つた点に本稿の独自性がある。また同時に従来

の郊外論との接続が課題でもあろう。今後の更なる分析が期待される。

(佐々木基裕)

白戸健一郎「アマチュア無線家たるための雑誌

『CQ ham radio』」

アマチュア無線の文化を『CQ ham radio』という雑誌を通して考察する。これまでにない画期的な視角をもつた研究である。GHQ占領下において、いまだ無線通信がアマチュアに許されない一九四六年、アマチュア無線連盟の機関誌として『CQ』は創刊する。一九五〇年代は再開されたアマチュア無線に参加するための助言として、一九六〇年代は制定された無線コードを中心とするアイデンティティの確立、七〇年代に入り青年文化の一つとしてハムが認められていく過程が鮮やかに描かれている。女性も含めた見知らぬ人とのコミュニケーションや若者を中心とするハム用語の浸透と、初期に確立された「自己

訓練」の規範は対立した。やがて、携帯電話やパソコンの普及により、コミュニケーションの楽しさ、技術への興味は無線通信から拡散していく。本研究は青年文化をコミュニケーションという観点から考察する糸口となり、また、雑誌研究において技術系の分野を開拓するという先駆性をもっている。

(河崎吉紀)

松永智子「複合文化社会・ハワイの日本語テレビ——テレビ雑誌『Kokiku』に着目して」

ハワイには一九六〇年代後半から英語字幕を付した日本語テレビ放送が存在した。この放送は日系人以外にも親しまれ、ハワイにおいて日本語テレビ文化を形成していたという。そうした文化圏を生み出し、支えた活字媒体こそ、日英両方の言語が並記されたテレビ雑誌、『Kokiku』であった。『Kokiku』は番組情報を提供するだけにとどまらず、読者の同胞意識や参加感覚を喚起し、日本語や日本文化を教

育するなど、読者とテレビを結ぶ媒体として機能していたのである。

本稿は『Kokiku』をもとに、複数のメディアが相互作用しながら一つの文化圏を生み出す過程を明らかにした萌芽的研究である。手法面から見れば、テレビ雑誌というストック可能な資料を用いることで、フローな電波を捕まえようとする新たな試みであるとも言えよう。エスニック・コミュニケーションの問題、メディア間の相互作用の問題など、精緻化すべき課題は多く、今後の広がりが大いに期待される論考である。

(長崎励朗)

花田史彦「メディア史研究の『フロンティア』——竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』」

本稿では、竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌』(創元社、二〇一四年)の内、メディア

史研究者による五本の論文、すなわち第三章の佐藤卓己『世界』論文、第六章の長崎励朗『朝日ジャーナル』論文、第七章の松永智子『ニューズウィーク日本版』論文、第九章の大澤聡『流動』論文、第一〇章の赤上裕幸『放送朝日』論文の内容を紹介しつつ、論評を加えている。上述の論文を紹介・論評したうえで、本稿では『日本の論壇雑誌』が「雑誌」研究にとどまらない、「論壇雑誌」研究たるため、近代日本における「論壇」というフォーマットの歴史の変遷を追うべきであったと主張している。それによりはじめて、本書で記述されている雑誌群(特に、これまで一般に論壇誌とは認識されてこなかったもの)の論壇における布置も明らかになると指摘している。

(白戸健一郎)

佐々木基裕「論壇の社会的分析——竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』」

本稿は、竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』のなかでも特に(教育)社会学者の手による各章について検討したものである。第一章の竹内洋『中央公論』論文、第二章の井上義和『文藝春秋』論文、第四章の稲垣恭子『婦人公論』論文、第五章の佐藤八寿子『暮しの手帖』論文、第八章の井上義和『諸君!』論文、第十一章の富田英典「ネット論壇」の計六章が組上に載せられている。評者は、本書をメディア史のみならず教育社会的にも先進性がある研究だと評価した上で、本書の素材であり分析概念でもある「論壇雑誌」の性格づけが曖昧だという問題を指摘する。そして、それを打開する手段として「論壇」そのものではなく「論壇的なるものを好む人ないしその態度」の分析を提案している。書き手が論壇誌とされ

る媒体においてどのような執筆態度をとっていたのか、また読み手がどのような雑誌を論壇誌と併読していたのか。その説明によつて、逆照射的に「論壇」の姿が見えてくるはずだと評者は述べている。

(花田史彦)

長崎励朗『ラジオの夢』の栄光と挫折——Goodman, David. *Radio's Civic Ambition: American Broadcasting and Democracy in the 1930s.*」

本書評は、Goodman David, “Radio’s Civic Ambition: American Broadcasting and Democracy in the 1930s”, Oxford University Press の内容を紹介したうえで、現代のメディア社会研究への応用可能性を示す。アメリカのラジオ史を扱った本書 (“Radio’s Civic Ambition”) のテーマは大きく三つに集約される。すなわち、「自由」という概念の捉え方をめぐる論点、娯楽と教育の融合に関する論点、そして市民的価値観に関する論点である。

る。そのタイトルが示すとおり、本書の最大の面白さは、大衆的なイメージの強いラジオにそれとは相反する市民的な価値観が期待されていた事実の解明にある。その結果が、音楽放送やメディア史上の重大事件である「火星人の襲来」の事例をもとに示される。本書評では、市民的価値観の実現が持つアポリアを、ニューメディアと階級論の結びつきという観点から論じており、単なるラジオ史にとどまらない本書の奥深さを感じさせる。本書の翻訳も着実に進んでいると聞く。まさに「お楽しみはこれからだ！」と言えよう。

(赤上裕幸)

Sato Takumi ‘Consumption of Nazi Culture Images in Postwar Japan.

This paper introduces the book (collection of papers) *Under Hitler’s Spell* and argues about the consumption of Nazi Culture Images in Postwar

Japan through it. It has 10 chapters, each of which is focused on a particular form of mass-media such as “the image of Nazism in popular film”, “Hitler

that an informed understanding about Nazi-Cul is necessary.

(Hasan Topaçoğlu)

Manga and comic-animation culture” etc. It talks about how the writer started his research about “Nazi-Cul” and then gives us the information about Nazism and Nazi-Cul research in Japan. Furthermore, it discusses the image of Hitler as an “absolute” evil and points out “Hitler’s culture was victory” in mass popular culture despite all the “evil” images on-going by introducing the book, *The War that Hitler Won*.

Then, it explains the historical formation of “Nazi-Cul” in Post-war Japan and how the image of Nazism has changed along with the Japanese views of war. On the end, it talks about the Nazi information into Otaku Culture and the expiration of “Hitler as Absolute Evil” and criticizes the way how history is told and suggests